

語文 第八十輯 (抜刷)

(国学通卷第九十二輯)

平成三年六月二十日印刷

平成三年六月二十五日発行

日本語の撥音と促音の音声特徴

栗 林 均

日本語の撥音と促音の音声特徴

栗 林 均

はじめに

「内破音」と「外破音」の区別は、ド・ソシュールの『一般言語学講義』に付録編として収録されている「音声学の原理」によっても、われわれになじみ深いものである。^{注1}しかしながら、わが国において、この音種の区別は、一方では、日本語とは縁の薄い言語だけにかかわる性質の理論として、他方では、すでに時代遅れとなった言語学史上の一見解として扱われ、日本語の音声との関連では特別に注意が払われてこなかった。この小論の目的は、「内破音」と「外破音」の区別が、むしろ日本語の音声の分類と記述に必要不可欠なものであることを示し、特に日本語の「撥音」および「促音」が、「内破音」という特徴によって、その他の子音と音声的、音韻的に対立しているということを論証しようとするものである。

撥音（はねる音）と促音（つまる音）の問題には、互いに共通する部分が含まれており、その議論にも重複する部分が少なくない。しかし、説明の混乱を避けるために以下では、ひとまず両者の問題を切り離し、最初に撥音の問題を検討し、つぎに促音について論ずることとする。

1.

仮名の「ん」（または「ン」）によって表記される、日本語の「撥音」が、音声的には [ŋ] [n] [m] 等、いくつかの音声の集合であることは、改めて論ずるまでもなく、よく知られた事実である。

日本語の音声に触れたどのような概説書でも、撥音の実際の現れとして、すくなくとも [ŋ] [n] [m] の3種の音があることを指摘しないものはない。もちろん、精密に見れば、撥音の実体は、これら3種の音に限られるものではなく、上の3つの音に加えてさらに数種類の音色を区別することが可能である。しかし、ここでは撥音の音声的な現れをできるだけ精密に表記分類することが目的ではないので、撥音の音声的な実体を次のようにまとめて、議論の出発点^{注2}としたい。

[撥音の音声的実体]

(1) [N]（口蓋垂鼻音）……語末で、また単独で。

ア^ン [aŋ]（餡）、ホン [hoŋ]（本）、バン [baŋ]（晩）、サン [saŋ]（三）等。

(2)

(2) [m] (両唇鼻音) …… [p] [b] [m] の前で。

サンバ [samba] (産婆)、アンマ [amma] (按摩)、サンポ [sampo] (散歩) 等。

(3) [n] (歯茎鼻音) …… [t] [d] [n] [tʃ] [ts] [dz] [dʒ] [ɲ] [ɳ] の前で。

テント [tento]、アンド [ando] (安堵)、カンナ [kanna] (鉋)、
ハンラン [hanlan] (反乱) 等。

(4) [ŋ] (軟口蓋鼻音) …… [k] [g] [ŋ] の前で。

テンキ [teŋki] (天気)、メタンガス [metaggasu]、ナンギ [naggi] (難儀) 等。

(5) [ɥ] (中舌鼻母音) …… [a] [o] [u] [w] [s] [ʃ] [h] の前で。

カンオン [kaũon] (漢音)、テンウン [teũun] (天運)、ケンアク [keũtaaku] (険悪)、ダンワ [daũwa] (談話)、タンス [taũsu] (箆笥)、ゼンハン [dzeũhan] (前半) 等。

(6) [ɻ] (前舌鼻母音) …… [i] [e] [j] の前で。

カンイ [kaĩi] (簡易)、シンエン [ʃiĩen] (深遠)、ウンユ [uĩju] (運輸) 等。

このように、音声的には、様々な実体をもつ「撥音」であるが、音韻論の見地からすれば、これを単一の「音素」とみなすことに異論はない。それを支持するのは、次のような論拠である：撥音としてあらわれる数種類の音声は、いずれも「鼻音」という共通の音声的な特徴を有しており(音声的類似)、しかもそれらは、互いに同じ環境に現れることがなく、現れる位置に関して合い補う分布をしている(相補分布)。

要するに、撥音は種々の音声の集合体であるが、その成員たる音声は、互いに対立して意味を区別する機能をもたず、音韻的に一つの単位を構成している。

2.

ところで、撥音の実際の現れとして上に示した [m] [n] [ŋ] という発音記号は、同時に、マ行の子音 [m]、ナ行の子音 [n]、およびガ行鼻濁音の子音 [ŋ] と、全く同じものである。それでは、撥音の [m] [n] [ŋ] と、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] とは音声的に同じ音であろうか、という疑問が生じる。(ここで「音声的に同じ音」というのは、音声学の単位である単音、つまり最小の音種としての同一性を言っているのであって、個人的な差異や「ノイズ」のたぐいの差異までもを含めた絶対的な同一性を意味しているわけでないことは、言うまでもない。)

この問題提起は、一見、いかにも間の抜けたものに思われるかもしれない。音声表記の原則は、一つの音声に対して一つの音声記号をあてることであり、同じ音声記号で表される音は、同じ音であることが前提とされているからである。この観点からすれば、撥音の [m] [n] [ŋ] とマ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] とを同じ音声記号で表記すること自体、すでに両者を同じ音として認めていることを意味している。

しかし、音声記号を介することによって、逆に音声的現実が隠されてしまうこともあり得る。われわれの立ち向かう対象はあくまでも音声的現実であって、音声記号は音声

的現実を忠実に反映する限りにおいて価値がある。はたして、この場合に音声記号が音声的現実を過不足なく反映しているかどうか、音声表記の妥当性をも考慮の対象に据えて、音声的現実に分け入って行かなければならない。

日本語音声に関する論著の多くは、撥音の [m] [n] [ŋ] とマ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] との違いについて、前者がそれだけで一つの拍となるのに対し、後者にはその働きがなく、後続の母音と結合してはじめて一つの拍となるということ^{注4}を指摘している。しかしながら、これは音声の内在的な性質に関して何も言っていない、ということ^{注4}を改めて確認しておく必要がある。

まず、「撥音の [m] は一つの拍をなす」という命題では、前もって撥音の [m] をマ行の子音 [m] から都合よく分離してしまっている (*petitio principii*)。両者の違いを明らかにするためには、次のような命題を基準としなければならない：

「それだけで一つの拍となる [m] は撥音と認められる」

しかし、そうすると、こんどは「それだけで一つの拍となる」か、ならないかをどうやって見分けるのか、という基準を示さなければならない。要するに、「拍とは何か」という新たな問題に直面せざるを得ないのである。一つの拍となる音とならない音とを見分けるためには、必然的にそれらの間になんらかの差異が存在しなければならないが、その差異は音声自体に内在する差異であろうか、それとも、それ以外のなんらかの要因による差異であろうか。

たとえば、アンマ(按摩)という語は、発音記号で [amma] と表記され、そこには2つの [a] と2つの [m] が含まれている。ここで2つの [a] が「同じ音である」というのと、まったく同じ意味で、2つの [m] も「同じ音である」ということができるであろうか？日本語の話者にとって、2つの [m] は全く別の音として意識されているということが出来るが、これは何に起因するのであろうか？2つの [m] のうち、前者の [m] はそれだけで一つの拍となり、後者の [m] はそれだけで一つの拍とならないという。しかし、なぜ前者の [m] はそれだけで一つの拍となり、後者の [m] はそれだけで一つの拍とならないと言えるのであろうか？それは「拍」の定義によることは言うまでもないが、「拍」の定義がどのようなものであっても、「それだけで一つの拍となる [m]」と、「それだけでは一つの拍とならない [m]」との間には、何らかの差異が存在しなければならない。その差異は、音声自体の差異か、それとも、それ以外の差異か、という問題に帰着する。論著の多くは、この問題を回避したまま、撥音の [m] [n] [ŋ] とマ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] とを同じ音声記号で表記している。そうした場合、両者は音声的に同じ音とみなされていると考えざるを得ない。

ところが、撥音の [m] [n] [ŋ] と、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] とが音声的に同じ音であるとする、音韻解釈の上で極めて困難な問題に直面する。

撥音の [m] とマ行の [m] とが音声的に同じ音だとした場合、これらは、音韻的にも同一の音素とみなされて当然である。音声的に同一の音を、音韻的に別々の単位として扱うことは、音韻論の原則としてありえないことだからである。^{注5}たとえば、語頭の [m]

(4)

と、語末の [m] を別の音素とみなすことが許されるとしたら、母音 [a] に先行する [m] と、母音 [e] に先行する [m] と、母音 [o] に先行する [m] とをそれぞれ別の音素とみなすことも可能になり、この範囲は際限なく広げられることになる。

さらに、撥音の [m] とマ行の [m] とが一つの音素であるとすれば、撥音の [n] とナ行の [n] も一つの音素となり、また撥音の [ŋ] と、ガ行鼻濁音の [ŋ] も、同様に一つの音素となる。結果的に、「撥音」という単位は日本語に存在しない、ということになる。^{注6}しかし、この帰結は、日本語話者の言語意識と合致するものではない。われわれの言語意識からすれば、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の子音と、撥音とを、次のようにそれぞれ別の音素として認めるのは極めて自然である。

マ行の [m]	/m/
ナ行の [n]	/n/
ガ行鼻濁音の [ŋ]	/g/
撥音の [m] [n] [ŋ]	/N/

しかし、上述のように、この解釈では、同じ音 ([m]) を別々の音素 (/m/ /N/) にふり分け、そのうちの一部 ([m]) を別の音 ([n] [ŋ]) とまとめて、一つの音素とするという点で、重大な問題を含んでいる。

音韻論上のもう一つの問題点は、弁別的特徴の理論に関するものである。これは、最小の音韻的単位である音素を、さらに同時的に生起する音声的な特徴（弁別的特徴）に分解し、音素をそうしたいくつかの弁別的特徴の束とみなす見解である。弁別的特徴には、調音的な特徴と、音響的な特徴が呈示されているが、いずれにしても、それは、現実の音声に内在する特徴とみなされていることに変わりはない。ところが、マ行の子音 [m] と撥音の [m] とが同じ音声であるとしたら、/m/ と /N/ の弁別的特徴の違いは、音声の外に求めなければならないことになる。

撥音の [m] [n] [ŋ] と、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] とが音声的に同じ音であるとする見方には、問題が多いのである。

3.

これに対して、撥音の [m] [n] [ŋ] と、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] とが音声的に異なった音であるとする見解も、これまでにいくつか提起されている。

アメリカの日本語研究者バーナード・ブロック (B. Bloch) は、両者に「長さの違い」があることを指摘している。^{注7}確かに、「拍」は長さ、つまり時間の単位である。撥音の [m] [n] [ŋ] が、それだけで「母音一つ」もしくは「子音+母音」と同じ一つの単位として機能しているとすれば——すなわち、撥音の [m] [n] [ŋ] と、マ [ma]、ナ [na]、ガ [ŋa] が、同じ長さの単位であるとすれば——撥音の [m] [n] [ŋ] は、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] より、母音の分だけ長いというのは、論理的に当然の帰結である。氏はマ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] に対して、撥音を [m'] [n'] [ŋ']

と表記して、両者の「音声的な違い」を示している。

これに対して、金田一春彦氏は、まったく異なった観点から、撥音の [m] [n] [ŋ] と、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] との違いを指摘している。

金田一氏は、佐久間鼎氏が撥音を「口腔におけるおしあけの過程のない」鼻音であるとした見解^{注8}を敷衍して、「撥ねる音は破裂のない鼻音一般だ」と規定した。氏によれば、子音の発音は、一般に「閉鎖」+「持続」+「破裂」の3つの過程からなる。そして、日本語で、撥音として現れる [m] [n] [ŋ] の子音は、実は「閉鎖」+「持続」を特徴とする鼻子音であり、「破裂」を含まない。これに対して、マ行、ナ行、およびガ行鼻濁音の子音 [m] [n] [ŋ] は「破裂」だけの鼻子音^{注9}である。

金田一氏は、「閉鎖」+「持続」からなる音声を「持続音」と呼んで、破裂だけからなる他の子音と区別した。この区別は、音声記号で [m] [n] [ŋ] と表記されている音声学上の一つの単位を、それぞれ前半部分と後半部分に分割して、それらを別々の音種と見なすことにほかならない。このような取り扱いは、一見、音声学の通念に挑戦するように見えるが、日本語の撥音の [m] [n] [ŋ] と、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の [m] [n] [ŋ] との違いの本質を明らかにする上できわめて有効なものとする。

これは、何よりも、われわれの観察とも合致する。われわれは両種の音を交換して語の意味に支障が生じることを確かめることができる。たとえば、サンバ [samba] (産婆)、テント [tento]、テンキ [tenki] (天気) 等の語に現れる [m] [n] [ŋ] は決して破裂を伴わない。もしも、これらの音に破裂を加えた場合、それらは、たちまち撥音 (「ン」) としての資格を失ってしまい、「サムバ」「テヌト」「テグキ」のようになってしまう。このことは、破裂を伴わない [m] [n] [ŋ] と破裂を伴う [m] [n] [ŋ] とが別種の音であることの明白な証である。

また、カンオ [kaŋo] (缶を) という発話では、撥音 (「ン」) に当たる部分は、通例中舌鼻母音 [ɯ̃] として現れる。これを軟口蓋鼻音の [ŋ] で取り替えて発音した場合、その [ŋ] が破裂を伴わない限り、「カンオ」の発音で通用するが、これがひとたび破裂を伴うや否や、カゴ (加護) といった別の語になってしまう。いずれの場合にも、破裂の有無によって撥音か否かが決定されていることは明らかである。

アンマ (按摩) [amma] という語に含まれる2つの [m] のうち、前者の [m] は決して破裂を伴わず、後者の [m] は破裂なくしては成り立たない。2つの [m] は交換不可能であり、それらを互いに交換した場合には、元の意味を保つことができない。破裂の有無はそれぞれの [m] にとって、本質的な特徴である。これは、カンノ [kanno] (缶の) という発話に含まれる2つの [n] についても、また、カンゴ [kango] (看護) という語に含まれる2つの [ŋ] についても、事情はまったく同じである。

金田一氏と同様に、川上泰氏も、撥音として現れる [m] [n] [ŋ] を「持続子音」と呼び、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の子音を「開放子音」と呼んで、両者を区別^{注10}している。「持続子音」という用語も、考え方も、金田一氏の説を継承しているものと考えられる。

しかし、金田一氏自身は、その後の論著では、「持続音」に関する自説を必ずしも前面

(6)

に据えていない。^{注11}また、金田一氏の「持続音」、川上泰氏の「持続子音」という音種のたてかたは、現在、国語学や日本語音声学の分野で広く受け容れられているとは言い難い。たとえば、国語学会編の『国語学大辞典』（東京堂出版、1980年）には「持続(子)音」の項目が立てられていないだけでなく、索引によっても、この用語を見つけることはできない。

その理由としては、次の点を指摘することができるであろう。

第1は、これが音声学の中で、特殊な理論として位置付けられたことである。金田一氏は、十分な根拠と論証を踏まえて、「閉鎖」+「持続」を特徴とする音種を規定しており、この点に音声学上の問題はない。しかし、氏はこれに「持続音」という、従来の音声学にはない、新しい用語をあてた。その音種は、既成の音声学の枠内には位置付けをもたない、特殊な音種とみなされたわけである。特殊であることは、反面、一般性をもたないことに通ずる。これがひとつの弱点であると思われる。

第2は、それが音声記号で表記されなかったことである。これは、おそらく、国際音声字母(IPA=International Phonetic Alphabet)で、その違いを区別する記号がなかったためであろう。この点は、むしろ国際音声字母の欠点でもある。しかし、このような重要な音声的な違いは、なんらかの工夫をして音声記号で区別するべきであった。音声の違いは、音声記号で区別されて初めて明瞭なものとして理解される。たとえ、撥音の[m]とマ行子音の[m]との音種の違いが強調されたとしても、それらが同じ音声記号で表記されている限り、両者は混同される運命にある。

4.

金田一氏のたてた「持続音」という音種は、実は、一般音声学にとってそれほど特殊な存在ではなく、既存の理論の枠内にその位置付けを求めることができる。音声学では、「内破音」(implosive)と「外破音」(explosive)とを区別しているが、金田一氏のいう「持続音」は、このうちの「内破音」に相当するものである。

「内破音」と「外破音」の区別については、F・ド・ソシュールの『一般言語学講義』に付録編として収録されている「音声学の原理」のなかに、きわめて明解に説明されている。^{注12}ソシュールによれば、appaという音声連続の2つのpの間には差異があり、前者は閉鎖に、後者は開きに対応している。この音の違いは、><という補助符号を用いて、(appa)のように表記することができる。そして、この区別は、閉鎖音だけでなく、摩擦音にも(affa)、鼻音にも(amma)、流音にも(alla)、そして一般にa以外の全ての母音にも(aooa)あてはまる。

ソシュールによれば、「pなるものは、ひとり現実のうちに遭遇するpとpとに共通の特質を結集した、一個の抽象的単位以外のなにものでもない」ということになる。「閉鎖または狭窄」と、その「持続」に対応する音は内破音、「破裂または開き」に対応する音は外破音と呼ばれる。なお、他の母音と隣接せずの一つだけで現れる母音は、内破音である。

[内破音 (閉鎖または狭窄+持続) と外破音 (破裂または開放)]

内破音 > > > > > >
p f m r i e etc.

外破音 < < < < < <
p f m r y e etc.

ソシユールは、この音種の区別を、音節構成の理論の基盤としたのであるが、日本語においては、この違いが意味を弁別する機能をも担っている。日本語の撥音は、音声的には、内破音の鼻音 ([$\overset{>}{N}$] [$\overset{>}{\eta}$] [$\overset{>}{n}$] [$\overset{>}{m}$] [$\overset{>}{\tilde{u}}$] [$\overset{>}{i}$] etc.) の集合である。これに対して、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の子音は、いずれも外破音 ([$\overset{<}{m}$] [$\overset{<}{n}$] [$\overset{<}{\eta}$]) であり、両者の音声的な差異はすでに明らかである。

このように、日本語の音声に「内破性」と「外破性」という音声特徴を認めることによって、音韻論上の問題点にも解決が見い出される。撥音は、上にみたように、「内破性」と「鼻音性」という特徴をもつ音声の集合である。鼻母音も、内破の鼻音であるから、これに含まれるが、マ行、ナ行、ガ行鼻濁音の子音は外破音で、これに含まれることはない。こうした音声的な類似性に加えて、各音は、第1節でみたとおり、互いに相補分布をなすことにより、音韻的に一つの単位とみなされる。

「内破性」と「鼻音性」は撥音音素を構成する弁別の特徴である。この2つの特徴が同時に満たされない限り、日本語の撥音(「ん」)は実現されない。調音位置の違い(両唇鼻音、歯茎鼻音、軟口蓋鼻音、口蓋垂鼻音)も、子音と母音の違い(鼻子音、鼻母音)も撥音音素と他の音素とを弁別する関与的な特徴ではない。

発話の連鎖における撥音の実際の現れは、それに後続する音の調音位置によって決定される。つまり、両唇音([p] [b] [m])の前では「内破性」と「鼻音性」という特徴に、「両唇性」という特徴が加わって [$\overset{>}{m}$] となり、歯茎音([t] [d] [n])の前では「歯茎性」という特徴が加わって [$\overset{>}{n}$] となり、軟口蓋音([k] [g] [ŋ])の前では「軟口蓋性」という特徴が加わって [$\overset{>}{\eta}$] となり、前舌の狭母音・半母音([i] [e] [j])の前では「前舌性」という特徴が加わって [$\overset{>}{i}$] となり、そして中舌・後舌母音や摩擦音([a] [o] [u] [w] [s] [ʃ] [h])の前では「中舌性」という特徴が加わって [$\overset{>}{\tilde{u}}$] となる。(単独で発音されたり、語末に現れる場合は、それに後続するのがポーズ、つまり、発音活動の休止である。)

5.

次に、促音(つまる音)の問題に移ろう。

促音も、撥音と同様、音声的には様々な音として実現される。まず、促音の音声的な実体を、次のようにまとめておく。

[促音の音声的な実体]

(1) [p] (両唇無声閉鎖音) …… [p] の前で。

(8)

イッパイ [ippai] (一杯)、コップ [koppu]、等。

(2) [t] (歯茎無声閉鎖音) …… [t] [tʰ] [ts] の前で。

バツタ [batta]、マツチ [mattʃi]、ミツツ [mittsu] (三つ) 等。

(3) [k] (軟口蓋無声閉鎖音) …… [k] の前で。

イッケン [ikken] (一軒)、キック [kikkʉ]、等。

(4) [s] (歯茎無声摩擦音) …… [s] の前で。

イッスン [issʉn] (一寸)、フッソ [ɸʉsso]、等。

(5) [ʃ] (後部歯茎無声摩擦音) …… [ʃ] の前で。

イッシュン [iʃʉn] (一瞬)、サッシ [saʃʃi]、等。

さらに、外来語や、擬音語・擬態語、感嘆詞等の発音においては、次のような「促音」も観察される。

(6) [ʔ] (声門閉鎖音) アッ [aʔ]、等。

(7) [h] (声門無声摩擦音) バッハ [bahha]、ゴッホ [gohho]、等。

(8) [ç] (硬口蓋無声摩擦音) イッヒッヒ [iççiççi]、等。

(9) [ɸ] (両唇無声摩擦音) エッフェル塔 [eɸɸeruto:]、等。

(10) [l] (側面音) アッラ [alla]、等。

(11) [b] (両唇有声閉鎖音) モッブ [mobbʉ]、等。

(12) [d] (歯茎有声閉鎖音) ベッド [beddo]、等。

(13) [g] (軟口蓋有声閉鎖音) バッグ [baggʉ]、等。

上の促音の現れをみると、閉鎖音あり、摩擦音あり、調音位置も実に様々である。これらの音だけに共通する特徴を見いだすことは、容易ではないように思われる。

撥音の場合と同様、促音に関しても、次のような疑問が生じる：促音を表す発音記号 [p] [t] [k] [s] [ʃ] 等は、パ行の子音 [p]、タ行の子音 [t]、カ行の子音 [k]、またサ行の子音 [s]、シャの子音 [ʃ] 等と全く同じものであろうか、これらは、はたして音声的に同じ音声であろうか。

促音 [p] [t] [k] と、パ行、タ行、カ行の子音 [p] [t] [k] との違いについて、前者がそれだけで一つの拍となるのに対し、後者はそれだけで一つの拍とならないという指摘があるが、それは、撥音の議論の際にすでに述べたとおり、両者の音声の内在的な性質の差異について何も述べてはいない。

促音 [p] と、パ行の子音 [p] とが音声的に同じ音であるとすれば、これらは、音韻的にも同一の音素とみなされて当然である。このことは、促音の [t] とタ行の子音 [t]、促音の [k] とカ行の子音 [k] についても同様である。その結果としては、日本語に促音という単位は存在しないことになってしまい、これは日本語話者の言語意識に反する帰結である。

これに対して、促音 [p] [t] [k] と、パ行、タ行、カ行の子音 [p] [t] [k] とが音声的に異なった音であるという見方は、再度検討するに値する。

B. ブロックは、撥音の場合と平行的に、両者の違いを子音の「長さ」の違いとして捉え、促音を音声記号で [p̣] [ṭ] [ḳ] のように表記した。

一方、金田一氏は、ここにも「破裂」の有無の違いを認めている。氏は、促音の [p] [t] [k] 等は、「閉鎖」+「持続」からなる「持続音」であるとし、「詰める音（促音）は口腔内の閉鎖一般だ」と結論している。

われわれは、この見解が、事実を正確に捉えていると考える。たとえば、イッパイ [ippai] という語には、2つの [p] が含まれているが、前者の [p] は決して破裂を伴わず、それが破裂を伴うや否や、その瞬間から促音としては用をなさなくなり、「イプパイ」のように聴取されしまう。促音の [p] [t] [k] は、破裂を伴わないという点で、パ行、タ行、カ行の子音とは決定的に異なる音種である。

われわれに残された仕事は、これを一般音声学の理論と結び付け、音声学の中に正しく位置付けることである。

金田一氏のいう「閉鎖」+「持続」からなる音声は、一般音声学でいう「内破音」に他ならず、促音を構成する音声は、ソシユールの表記法にしたがって、次のように表すことができる： $[p̣ \ ṭ \ ḳ \ ṣ \ \inṭ \ \etạ \ ḥ \ \zetạ \ \phị \ ḷ \ ḅ \ ḍ \ g̣]$ 。これに対して、パ行、タ行、カ行の子音は外破音 $[p̣ \ ṭ \ ḳ]$ である。

促音の [p] [t] [k] と、パ行、タ行、カ行の子音 [p] [t] [k] との違いをこのように捉えることによって、促音の音韻解釈上の問題点も、撥音の場合と全く平行的に、解決することができる。

なお、促音は、「内破性」をもった音の集合であるが、それだけで促音が規定されるわけではない。内破音には、撥音も、母音も含まれるからである。促音を撥音と区別するためには「非鼻音性」（＝「口音性」）という特徴をつけ加え、また促音を母音と区別するためには「非母音性」という特徴をつけ加える必要がある^{注14}。こうして、促音は、「内破性」と「非鼻音性」と「非母音性」という3つの特徴を合わせ持った音の集合であると規定することができる。3つの特徴のうち、いずれが欠けても促音（「ッ」）は実現できず、これらは、促音音素を構成する弁別の特徴とみなされる。促音は、「内破性／外破性」という特徴によって、パ行、タ行、カ行等の子音と対立し、「鼻音性／非鼻音性」という特徴によって撥音と対立し、「母音性／非母音性」という特徴によって母音と対立している。

促音の実際の現れも、それに後続する音の調音位置と調音様式によって決定される。促音は、後続する子音と、「外破／内破」という特徴だけを除いて、その他の点では調音位置も調音様式も全く等しい音として実現されるのである。

6.

母音、撥音、促音、およびその他の子音の関係を、弁別の特徴によってまとめると、次のように表すことができる。

	母音	撥音	促音	他の子音
内破性 (／外破性)	+	+	+	-
鼻音性 (／口音性)	-	+	-	±
母音性 (／非母音性)	+	±	-	-

このように、日本語の音声・音韻を記述する上で、内破音／外破音という音種は、有声音／無声音といった音種と同様、基本的かつ不可欠な特徴として位置付けられるべきである。

撥音と促音を「内破音」として認識することは、国語学だけでなく、一般音声学や言語学にとっても、重要である。『現代言語学辞典』(成美堂、1988年)の「内破音」(implosive)の項目では、次のような説明をみることができる。^{注15}:

「閉鎖は行われるが、解放のおこなわれない閉鎖音のこと。すなわち、入りわたりがあって出わたりのない閉鎖音のこと。外破音に対する。例えば、英語 what time [(h)wɒttáim] (何時)；ドイツ語 Nachttisch [náxtti:] (ベッドサイドテーブル)；フランス語 cette table [settábl] (このテーブル)などの最初の [t] は、解放が行われない。

古期中国語の入声の p, t, k は内破音であったといわれ、また、日本語の鹿児島方言の「首」「釘」「靴」「柿」「かび」などの語末の音も、内破音であるといわれている。」

ここでは、英語、ドイツ語、フランス語、古期中国語および、日本語の鹿児島方言の例が取り上げられているが、撥音と促音には言及されていない。日本語に最も一般的で身近な現象である撥音と促音は「内破音」に他ならない。「内破音」という音種の理解のためにも、「内破音」と日本語の撥音・促音とを結び付けることが肝要と思われる。

一般音声学の見地からしても、「外破音」と「内破音」を区別するこうした日本語の音声現象を、表記の上でも区別できるような発音記号の体系を備えておくことは是非とも必要である。この点で現行の国際声字母には、なお改善の余地がある^{注16}と考える。

注(1) F・ド・ソシュール、小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店、1972年。「付録編 音声学の原理」57-92頁。

(2) 国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版、1980年。

上村幸雄「現代日本語 音韻」『言語学大辞典 第2巻』三省堂、1989年、1692-1716頁。

(3) 「撥音＋ラ行子音」の連続は、通例 [nl] として現れる。

(4) 注(2)に同じ。さらに、

中條修『日本語の音韻とアクセント』勁草書房、1989年；

小泉保『日本語の正書法』大修館、1978年、等も同様。

- (5) 唯一「中和音素」を認める場合は、この原則の例外をなす。有坂秀世氏は、日本語の撥音をまさにこの中和音素として扱っている。
有坂秀世『音韻論 増補版』（三省堂、1959年）を参照。
- (6) 日本音声学会編『音声学大辞典』（三修社、1976年）は、この立場を取っている。
- (7) B. Bloch, “Studies in Colloquial Japanese IV. Phonemics”, *Language* 26. 86-125, 1950.（「口語日本語の研究 IV. 音素論」Roy A. Miller 編, 林栄一監訳『ブロック日本語論考』研究社, 1975年, 114-166頁所収）
- (8) 佐久間鼎『日本音聲學』京文社、1929年。（風間書房、1963年復刊）
- (9) 金田一春彦「撥ねる音・詰める音」『国語と国文学』昭和33年6月号（金田一春彦『日本語音韻の研究』東京堂出版、1977年、154-167頁所収）
- (10) 川上夔『日本語音声概説』桜楓社、1977年。
- (11) 金田一春彦「共通語の発音とアクセント」NHK 編『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』日本放送出版協会、1985年。
金田一春彦『日本語 新版（上）』岩波新書、1988年、等。
- (12) 注(1)に同じ。
- (13) ただし、最後の3種の音は、はたして有声音として認めるべきかどうか、疑問である。
- (14) 母音と促音との差異を示すものとして、ここでは「母音性／非母音性」という特徴によったが、これ以外にも「子音性／非子音性」「共鳴性／非共鳴性」といった特徴によっても両者を区別することが可能である。
- (15) 田中春美（編集主幹）『現代言語学辞典』成美堂、1988年、239頁。
- (16) 1989年改訂の国際音声字母 (IPA) では、「解放の聞こえない音」(No audible release)を補助符号 [ʔ] で表すとしているので、これを内破音の表記とすることができる。しかし、内破音の音種を特に表記し分けようとしていない点は、以前と同様である。

(本学専任講師)